わたしと美術館

中川邦昭氏（写真）は大和文華館の資料写真などを撮影していただいている写真家のお一人です。中川氏は昭和53年８月７日から８月28日まで、「日本茶業・窯業友好訪華団」（団長・愛媛大学教授藤岡喜愛氏）の一員として、中国各地を旅行されました。その訪問地は上海、杭州、南昌、景徳鎮、庐山、広州、香港でした。今回の『美のたより』に、美術に関係の深い景徳鎮の写真と、その紀行文を寄稿していただきました。（編集係）

〔中川邦昭氏略歴〕

昭和18年京都に生れる。日本大学芸術学部写真学科を卒業、岩宮武二氏に師事、その後フリーカメラマンとして活躍している。日本写真家協会会員。写真集として、『京都の記録・町のかたち』（昭和49年、時事通信社刊）、『祇園祭』（昭和51年、筑摩書房刊）などがある。

焼物のみち —景徳鎮（けいとくちん）—

写真家　中川邦昭

景徳鎮を遠望する

上海から夜行列車に乗って南昌に着いたのは、午前十一時頃であったろう。もう陽はだいぶ高くなっていた。あの中国革命軍の蜂起は、この都市に始まったと聞く。だが、ホテルの屋上から眺望する静かな南昌の町並からは、そこが中国近代史の一頁を飾る歴史的な舞台であったところとは到底思えなかった。町全体が灰色で暗く、どこかくすんだ感じで、中国のどこにでもありそうな地方都市の一つにすぎなかった。まだ夜行列車の疲れが残っており、市内見学はそこそこに済ませて、その日は早目に寝台にもぐり込んだ。

翌日（八月十五日）の早朝、午前七時に、私たち一行は窯業の町として有名な景徳鎮に向けて出発した。南昌の家並が切れるあたりから、道はまだ舗装されていない粗末な細い道に変わり、私たちを乗せたバスは砂ぼこりをあげて進んでいった。道の周りは、白い綿花畑がどこまでも広がっていた。綿の花はまだ完全には開ききってはいなかった。早立ちのせいもあって、バスに揺られているうちに軽いねむりにおちていった。ふと目を醒ますと、あたりの景色は以前とあまり変わりなかった。そんなことを何度かくりかえした。相変わらず綿花畑の中をバスは走っていった。途中、黄金皐というところで昼食をとり、景徳鎮近くに来たころは、陽は沈みかけていた。

長旅の疲れからだろうか、それともこの地方特有の体温より高いという暑さのせいだろうか、身体は妙にけだるかった。景徳鎮の町の傍を一筋の川が流れていた。水量はさほど多くなかった。その川筋に沿ってしばらく逆のぼると、長い大きな橋が架っているのが見えた。そこが景徳鎮の町への入口であった。この橋の上から遠望する景徳鎮の町は、何本もの窯の煙突が立ち並び、そこから立ち昇る黒煙とたそがれのほの赤い光とが混ざりあって、あたかも町全体が一つの巨大な窯であるかのように燃えあがっていた。その力強い光景は、これから見ようとするものに対する期待と不安とを私にいだかせた。

翌日、私たちは市内を見学して歩いた。この町は私が今まで景徳鎮という語感から想像していたよりも広大で、都市全体が焼物の工場といってよい程であった。人々の多くは焼物の仕事に従事している様であった。私たちは相変らず精力的にいろいろな工場を見て回った。どこでも彼らは親切で、オープンにすべてを私たち外来者に見せてくれた。「為民磁器工場」（写真3、4）では2000名の人たちが、茶碗、コーヒーカップなどの食器をつくっていた。また、「景徳鎮市芸術磁器工場」（写真1、2）では900名の人たちが花瓶、陶板、置物など主に輸出磁器を製作していた。これらの陶磁工場はすべて近代化されていて、日本にある景徳鎮窯のやきものから描いていた景徳鎮のイメージは少しずつ崩れていった。市内の陶磁館や博物館には宋、元、明、清の良いものはほとんどなかった。それらは各時代に、乞われて南京や北京に、そして海外に出てしまったのであろう。館内には現代の作品があふれていた。それらの中には実に精巧な作品があり、中国の陶磁技術の伝統の重みを感じた。しかし、形や文様が東洋的なものからずいぶん離れ、西洋化していたのには少からず失望した。

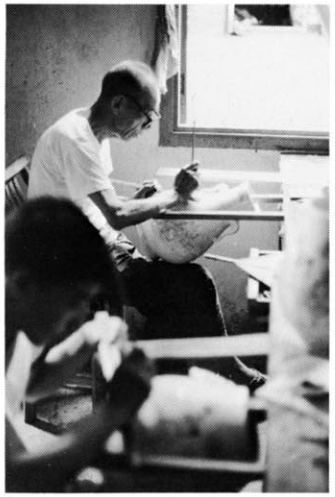
八月十九日、私たち一行は猛暑の景徳鎮をあとにして、次の訪問地庐山に向った。景徳鎮の町はずれの、あの最初に立った橋の上で、私たちは最後の写真を撮った。橋の傍の浅瀬には六、七隻の小さな川舟が停泊していた。その川舟をぼんやりながめながら、昔、この町でつくられたやきもののことを思った。きっと、そのやきものはこのような川舟に積み込まれ、この川を下り、ほど遠からぬ中国交通の大動脈の長江へ出て、南京へ、そして大海を渡って日本へ、他の国へ運ばれていったのであろう。そのとき、大和文華館の元の釉裏紅の梅瓶や明初の青花の双魚文大皿や万暦の五彩の小壺（写真）の姿が目に浮んできた。これらの名品もこの景徳鎮で生まれ、この川を下っていたのであろう。この遠く長い道のりと、長い時の流れ、そしてやきものの命の長さを思ったとき、えもいわれぬ感動におそわれた。遠ざかる景徳鎮の煙突は変らず黒煙を上げていた。

その日の夕方、庐山から見る長江は、ゆっくりゆっくり中国大陸を蛇行していた。

景徳鎮(けいとくちん)
中国江西省饒州府浮梁県西興郷にある中国最大の製陶地である。唐代に始まり、宋代には青白磁(影青)、元代以降には、染付、釉裏紅、五彩など、その他多種類が焼かれている。

五彩花鳥文小壺(明)

写真／景徳鎮の磁器工場にて



(1)

(2)

(3)

(4)

季刊 美のたより No.47
昭和54年6月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.